

溉の家門は雍睦にして、兄弟は特に相友愛す。初め、弟の治と常に共に一齋に居す。治、卒す。後、便ち捨して寺となし、因りて腥羶を断ち、終身蔬食す。

とあり、また(5)王規は、中大通二年(五三〇)より都城の外にある鍾山の宗熙寺に住んでいたことが記されている。また、文学の面において蕭綱に対する影響の最も大きかったとされる(6)徐摛も、仏教的素養を十分に持っていた人物であった。

これらの人々は、正史にその仏教的事蹟が記録されている言わば積極的な例である。しかし梁代の士大夫にとって、仏教的知識がその素養として不可欠なものであったことは言を俟たない所であり、それがまた、経律異相等とは異り、専ら在俗の知識人によって、法宝聯璧と言う大部の類書を成立せしめ得た大きな要因であったと考えられる。

蕭綱が法宝聯璧序に、「鹿園の深義、龍宮の奥説に至っては、遠く学徒に命じ、親ら講肆に登る」と書いたように、蕭綱自ら指揮を取り、自分の周囲にいる当時著名の文学の士を総動員しての編纂事業が行われた結果、「百法の明門、茲に総べ備わる」(蕭綱・法宝聯璧序)と言われ、また「四百許篇」(法琳・弁正論)

二〇〇巻、或いはそれ以上と言われる当時最大の仏教的類書が完成したのである。但し、これがどのような体裁を持っていたものかという点に関しては、その残簡すら残されていない以上、類推するより他に方法がない。今は道宣の集神州三宝感通録の記事によって、その中に高僧の伝記が含まれていたと言うことと、大屋徳城氏の「高麗統藏雕造放」によって、高麗の義天の編纂した釈

苑詞林が法宝聯璧をその材料の一つとしたという氏の指摘を承けて、或いは法宝聯璧中には蕭綱自らが撰した碑文等も含まれていた可能性が考えられると言うに止めておきたいと思う。

註① 蕭子頭には後漢書一百卷・齊書六十卷・普通北伐記五

卷・貴儉伝三十卷等、庾仲容には抄諸子書三十卷・衆家地理書三十卷・列女伝三卷等の著書がある。その他、(2)張綰の兄である張緬・張績には、前者に後漢紀四十卷・晉抄三十卷・抄江左集が、後者に鴻宝一百卷の著作があり、(3)陸罩の父陸杲には沙門伝三十卷の著書があるなど、類書編纂の仕事につながる活動をしている者が散見する。

② 一例として、(5)王規の子の王褒を挙げれば、彼は「幼訓」を著して三教を兼ね学ぶことを説いている。そこには次のように言う。

……既崇周孔之教、兼循老釈之談、江左以来、斯業不墜、汝能脩之、吾之志也。(梁書四一・王規伝附)

### 本願内景の表現たる名号

井上 恵 樹

親鸞は名号をもって本願招喚の、正しく現群生海になされた勅命であり、群生の行すべき往生行の、現群生海への廻向であると示し、それは選択本願そのものの在り方であると示している。その道見はいかなる背景を内に秘めて進り、吐露せられたのであるか。

ことを私はまず、名号に六字積をなすことによりて、名号の内に仏本願の顕現というものを身をもって了知せることに自身の求道の全てをかけた善導の上ですでに尋ねてみたのであった。(学報五十五巻四号、群生真底の法感)。そこを簡単に触れるならば「定即息慮以凝心散即廢惡以修善」なる定散法の真淵に永劫に大悲現動する悲願の如來は、「定心難修息慮凝心故、散心難行廢惡修善故」と現動展開して自力に効なき群生海の真主体となる事によりて、衆生をして願力自然に定散諸機各別の自力の三心ひるがえしめ、求めず知らざるに如來利他の願海に引入せしめけるのである。定散諸機をあわれむ、本願道は、実は「定散諸機をこしらえて」そこにこそ真に逆説的に本願招喚の勅命を信受せしめたもう絶対道であった。而して、善導はこの定散道の只中から称仏名の唯一行を選び取った。「觀經」そのものも、定散の身の自覚内容である下々品の身に称仏名行が善知識によりて与えられると経示する。ここに於てそれを思えば、それは、仏名号が定散の具す既述の内面意義を凝集するということであろう。仏名号がその前景として、その動的歷程として定散の実義を含む。主体を廻向する如來降誕と、そこに自ずと転成する乘彼願力という動的構造を仏名号が既に内景として具する。親鸞のいう定散、自力、称名とは、深く窺えばかくなる非常に動的な消息をもつてであろう。ここに善導が名号に「南無は帰命・発願廻向、阿弥陀仏はその行」と深知して、名号の内面を信開していった、その本源的理由があると思われる。

而してここに、名号を体とする不虛作の悲願現動につき、曇鸞

の上に更に明らかに跡づけようと思う。善導により挙體的に聞き取られた名号の内景は、既に曇鸞によりて、「彼無碍光如來名号能破<sub>二</sub>衆生一切無明<sub>一</sub>能滿<sub>二</sub>衆生一切志願<sub>一</sub>」なる本願の信が、自ずとそこに「有<sub>二</sub>称名憶念而無明由存而不<sub>レ</sub>滿<sub>二</sub>所願<sub>一</sub>者何者」と流れ出て、示された事であった。この自身の真現実にひきかかての「称名憶念あれども……」なる称名そのものが問う問は、名号が衆生一切の無明を破し志願を満つると知る真实信心が既に内に疑を孕むという如き事をいうのでは決してなく、却ってその動的現動に外ならない。實際、曇鸞はこの自らの問に対して「由<sub>二</sub>不<sub>二</sub>如実修行与<sub>二</sub>名義不相応<sub>一</sub>故也」と明している。ここに如実修行とは止・觀の如実修行である。而して曇鸞はこの觀の修行のところに未証淨心の菩薩を標出せられた。未証淨心菩薩は後の平等法身の積に示される如く、作心をもつての故に七地沈空の難に墮し、「上<sub>レ</sub>不見<sub>二</sub>諸仏可<sub>レ</sub>求下<sub>レ</sub>不見<sub>二</sub>衆生可<sub>レ</sub>度<sub>一</sub>」なる二乘地墮落の現実、そういうものに外ならぬ悲傷限りなきものである。では称名憶念しながらも、衆生は未証淨心菩薩として菩薩の死に到らねばならぬ。しかしながらこの未証淨心の菩薩の自覚は、決して虚仮に終り果ててしまうことに止まらない。虚仮自体が中から深い意味をもって甦る。虚仮自体が、本願のいわれを限りなく聞き当てずにはおかない。天親・曇鸞に体験せられたこの消息、それが直ちにこの止・觀如実修行の後に、觀察三種莊嚴功德と示されて来るのであろう。未証淨心・菩薩の死の自覚に即一に、不可思議にも聞き開かれて来る三種莊嚴功德の世界とは、『論註』上巻、器世間・衆生世間莊嚴功德成就に縷々示される如く、三塗を免か

れざる衆生を見そなわすが故に、仏が「本」願をたてて成就し給う莊嚴海である。それは実に、「本」なる始源の時に群生汚惡海に既に本願了受の主体となつて、そこにこそ如来自らの莊嚴を成就する事ができる、如来界の不思議が語られている。ここに、先に善導の考察に於て示した（「群生真底の法藏」）本願の動的廻向成就の内景というものが脈打っている。善導の自覚と思ひ合わせるとき、曇鸞のいう未証淨心菩薩がなす不如実修行とは、ここに誠に如来の群生海大悲の永劫修行に外ならぬと言ひ得るのである。如来たる如実修行が、如実修行不相応という形で虚妄群生海の只中に大悲招喚する。不如実修行とは、如実修行の在り方そのものであらう、如実修行の見聞く内容であらう。だからこそ、如実修行を明すに先ず不如実修行が述べられ、これと相違するを如実修行相応とすといわれる事によりて、如実修行はただ不如実修行こそを逆説的内容として持具するのである。

ところで蓮師は「南無阿弥陀仏といふ本願をたてましくて、南無阿弥陀仏となりまします」と、本願のいわれを聞きとられた。そこには、群生生命に南無して衆生の本願信受の主体とならんと不如実修行し給う法藏と、そこにこそ真に如実修行成ずる阿弥陀あることを思わしめる。そしてこの蓮師の言葉は、そのような如来の如実修行というものが名号「南無阿弥陀仏」の一点にこそ展開することをも、深い宗教的体験の事実の重みをもって物語たるのである。曇鸞に帰れば、称名憶念するということにこそ、以上の様な如実・不如実修行の世界が開けるのである。如実・不如実の如來修行はここに、称仏名のもつ内面意義であると

言わねばならないであらう。事実としてこの現世に不可思議にも称する事のできる仏名、その仏名としてこの世に在るといふ事実が、その内的生命として如実、不如実の如来界をもつという驚ろくべき意味を具す。南無阿弥陀仏・名号は、弥陀が群生の真原の主と降誕し、一切を不虚作に撰取し給う、その現歴史上に於る現一点であり、現なる場であり、現なる証しであらうか。蓮師の先述の道見の内景を、苦に逼められて、仏を念ずる違なき最下濁惡の凡夫の身において、現に南無阿弥陀仏を称せしめられて惟うとき、その感は強く迫る。親鸞が「現世利益和讃」に於て十首もついやして、「南無阿弥陀仏をとなふれば」といふ称名の事実のところに、天神邪神に碍えられず守られ諸仏に圍繞せられる事を感動深く表わされたのも、如上の消息であらう。ここに曇鸞は「阿弥陀如来の方。便莊嚴真実清淨無量の功德の名号」といいて、「称名憶念あれども無明なお存する」現実なる名号の中に、如来の大悲降誕の方便（方便には如上の不如実修行の意が直接に躍動しておらう）と、不虚作の真実とを賛じていかれたのである。如実・不如実修行を名義相応・不相応と聞かれたのもその消息である。而して「我一心」とは、この名号憶念の内景を、現身をもつて一心に信知すべく廻向された心であらう。

ともかくも曇鸞は仏名号の内景に、誠に群生の真根源に不虚作に到り、却つて主体となる本願招喚というものを我一心に聞き取っていた。それが善導を通り、親鸞の上に、六字釈として深められていったのであらう。